

ワシントン州音楽スタンダードにおける音楽リテラシー

—「創造」領域を中心に—

廣 濱 隆 世

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期)

Music Literacy in Washington State Music Standards: “Creative” Domain

Ryusei HIROHAMA

Abstract

The National Core Music Standards, a set of common educational goals in music formulated in the United States in 2014, state that the ultimate goal of music education is the acquisition of "music literacy. This study focuses on the "creative" domain of the Washington State Music Standards, which has the same structure as the National Core Music Standards and also includes specific instructional content and analyzes it to clarify music literacy skills and their learning content. Music literacy in the “creative” domain was defined as "the ability to create and perform musical ideas and compositions that are connected to specific purposes and contexts (social, cultural, and historical). In addition, by acquiring musical knowledge and skills along with the process of creating music, competency development was secured while adding the ability to truly engage with music. Therefore, it was suggested that in the U.S., the idea is not to use music to develop competency but to refine competency by learning music itself. This presents one way of thinking about how music studies should be in a competency-based curriculum.

1. はじめに

予測不可能な社会の到来に伴い、学校教育では社会的なスキルである資質・能力（コンピテンシー）を軸としたカリキュラムの開発が進んでいる（勝野, 2013）。現在、日本の学習指導要領でも「生きる力」を育むために、資質・能力、教科固有の知識・スキル、またそれら結びつけるものとして、教科の本質に関わる「見方・考え方」という概念が示されている。このような動向の中で、その教科の特性や本質に照らして資質・能力がよりよく顕在化・拡充・洗練するよう支援する（奈須, 2017）ことが必要であり、音楽科においても、音楽の本質的理解を得るための音楽学習と乖離しない音楽科教育のあり方について検討していくことが不可避である。その際に、コンピテンシーをベースとしており、「音楽リテラシー（Music Literacy）」の獲得を音楽科教育の最終目標にしている（小川, 2015）米国の音楽スタンダードに着目することによって、我が国への示唆が得られるのではないかと考えた。

米国では、全米共通のスタンダードとなる「全米コア音楽スタンダード（National Core Music Standards）」が2014年に策定された。これは、1994年に策定された「全米芸術教育スタンダード（National Standards for Arts Education）」の音楽分野の改訂版である。米国では教育の権限が州に委ねられているため、全米コア音楽スタンダードは法的拘束力をもたず、多くの州は全米コア音楽スタンダードに沿ったスタンダードを制定している。ワシントン州もその1つである。ワシントン州音楽スタンダード（2017年に採用）は、全米コア音楽スタンダードと同様に芸術プロセスを「創造（Creating）」、「演奏（Performing）」、「反応（Responding）」、「関連性（Connecting）」の4つの領域で構成し、さらに内容スタンダード上に「学生への提言（Suggestions

for students)」と「例 (Examples)」の2つの項目を示すことで、具体的なアイデアや実践例を説明している。以上のことから本稿では、ワシントン州音楽スタンダードの分析を通して、米国の音楽科教育において獲得が目指される音楽リテラシーの一端を明らかにすることを目的とする。その際に「創造」領域をとり上げる。

2. 米国のスタンダードにみる音楽リテラシー

(1) 全米コア音楽スタンダードにおける音楽リテラシーの定義

音楽リテラシーは、音楽教育の中ではすでに一般的な言葉として知られているが、その言葉の認識としては、演奏や分析など楽譜の読み書き能力が中心となっている (Broomhead, 2019, pp.1-6)。では、音楽リテラシーとはどのような概念なのか。全米コア音楽スタンダードを含む芸術スタンダードについて説明された文書である「全米コア芸術スタンダード：芸術学習の概念枠組 (National Core Arts Standards: A Conceptual Framework for Arts Learning)」(以下、概念枠組)によると、芸術リテラシーについて、以下のように説明されている。

概念枠組による芸術リテラシーの定義

芸術リテラシーとは、芸術に真の意味で参加するために必要な知識と理解のことである。芸術の言語における流暢さとは、芸術に特有のシンボリックかつメタフォリックな形式を通して、創造、演奏/制作/提示、反応、関連する能力である。それは、芸術的にリテラシーのある人が、芸術の知識、スキル、能力を他の科目、設定、文脈に移すことを可能にする、特定の哲学的基盤と生涯の目標を具体的に表現している。

(A Conceptual Framework for Arts Learning, p.17 より筆者訳)

以上のように、芸術リテラシーとは、芸術に真に参加できるように必要な知識と理解と示されている。全米コア音楽スタンダードの芸術プロセスを構成する、「創造」「演奏」「反応」「関連性」の各領域は、芸術リテラシーのある芸術の専門家が実行する、芸術に共通するプロセスを表している (概念枠組, p.8)。つまり、音楽スタンダードでは音楽家が行っているプロセスを生徒も行うことができるようになることを求めている。しかしここで注意すべき点は、このプロセスを身につけさせることは決して音楽家を育成するためではなく、音楽の本質的な筋道を提供することを目的としていることである (Shuler et al., 2014)。このことから、音楽リテラシーは芸術プロセスを実行することで音楽の本質と関わっていく能力と捉えられる。加えて、芸術に共通する価値観として、「芸術としてのコミュニケーション」、「芸術としての創造的自己実現」、「芸術としての文化・歴史・連結点」、「芸術としての幸福になる手段」、「芸術としてのコミュニティーへの参加」の5点が示されている (概念枠組, p.10)。その項目それぞれに、芸術リテラシーのある市民が用いる哲学的基盤と生涯にわたる目標が示されており、芸術と本質的に関わる能力を得たことで、どのように社会生活の中で活かされるのかが述べられている。

また、全米コア音楽スタンダードに沿って論を展開しているブルームヘッドは、「音楽リテラシーとは、音楽の専門家が『正しい』あるいは『実行可能』と認める方法で音楽テキストを交渉し、創造する能力のことである」(Broomhead, 2019, p.7) と言い換えている。ここでの「音楽テキスト」とは、楽譜や楽器など音楽的な意味を持った資源のことで、「交渉」を読むこと、「創造」を書くこととして表している (Broomhead, 2019, p.7)。これらのことから、米国のスタンダードにおいて音楽リテラシーとは、単に楽譜の読み書き能力ではなく、音楽的な能力全体を指す包括的な概念であるといえる。

(2) 全米コア音楽スタンダードにおける音楽リテラシーとコンピテンシーのつながり

全米コア音楽スタンダードの中で、どのように音楽リテラシーとコンピテンシーが結びついているのだろうか。概念枠組によると、芸術教育を提供することで「生徒たちの大学やキャリアへの準備が整い、学校の成功、最終的には国の成功の基礎が築かれることを果たすことができる」(p.2) と説明され、将来の経済的な成功における芸術教育の存在価値を強調している。その上で、「創造性と革新」「批判的思考と問題解決」「コミュニケーション」「コラボレーション」の4つを挙げ、芸術教育を通じた21世紀スキルの育

成を求めている。また、各芸術リテラシーには、歴史や慣習に基づいた分野独自の言語があり、それらを習得するために深い知識と訓練が必要である、と述べられている。同時に、芸術リテラシーのある人は、芸術の知識や理解を、学校の内外を問わず、さまざまな場面で活用できる能力を持っていないとも示されている。

以上のことから、全米コア音楽スタンダードにおける音楽リテラシーは、音楽の本質と関わるためのプロセスを実行できる音楽的の包括的能力であり、それらを持っていることでコンピテンシーの育成にも効果があると捉えられているといえる。

3. ワシントン州音楽スタンダードの概要

(1) ワシントン州音楽スタンダードの構成

ワシントン州音楽スタンダードは、全米コア音楽スタンダードに沿った内容で構成され芸術プロセスが4つの領域、すなわち「創造 (Creating)」、「演奏 (Performing)」、「反応 (Responding)」、「関連性 (Connecting)」に分かれる。また、芸術科目に共通する11のアンカースタンダード (Anchor Standard) が設定されている。アンカースタンダードとは、教師が学生に芸術教育全体を通して示すことを期待する、一般的な知識とスキルを表している。このアンカースタンダードの内容も、全米コア音楽スタンダードと同様である。これらのアンカースタンダードは、芸術のすべての分野とグレードレベルに並行にまたがっており、芸術リテラシーに関する具体的な能力を表現している。

芸術プロセスとアンカースタンダード (表1) では、音楽の知識・スキルの習得を直接的に目標としておらず、芸術プロセスを通して音楽そのものを理解したり、活動のプロセスに重心を置く内容が示されている。また、4つの領域ごとに構成要素が設定されており、さらにその構成要素ごとに、グレードスタンダードが示されている。

(2) ワシントン州音楽スタンダードの内容

ワシントン州音楽スタンダードでは、構成要素ごとに全てのグレード (K-Grade8) に共通する、「アンカースタンダード」「永続的な理解 (Enduring Understanding)」「本質的な問い (Essential Question)」の3つ、そしてグレードごとに設定されている「パフォーマンススタンダード (Performance Standards)」「学生への提言 (Suggestions for students)」と「例 (Examples)」の3つによって内容が構成されている。例として構成要素「イメージ」におけるグレード2のスタンダードを表2に示す。

表1 芸術プロセスとアンカースタンダード

芸術プロセス			
創造	演奏	反応	関連性
定義: 新しい芸術的アイデアや作品を考案し発展させる。	定義: 解釈と上演を通して、芸術的アイデアや作品を理解する。	定義: 芸術を伝える意義について理解し評価する。	定義: 芸術的アイデアや作品と個人的意味や外部とのコンテキストを関連付ける。
アンカースタンダード			
1. 芸術的アイデアや作品の創造と概念化。 2. 芸術的アイデアや作品の構造化と発展。 3. 芸術作品の改良と完成。	4. 上演のための芸術作品の選択、分析、解釈。 5. 上演のための芸術的技法と作品の発展と改良。 6. 芸術作品の上演を通じた意図の伝達。	7. 芸術作品の知覚と分析。 8. 芸術作品の意図や意味の解釈。 9. 芸術作品を評価するための基準の適用。	10. 芸術作品を作るための知識と個人的経験の統合と関連付け。 11. 理解を深めるための芸術的アイデアや作品と社会的、文化的、歴史的な文脈の関連付け。

(Washington The Arts Learning Standards (Music), p.VIより筆者作成)

表2 ワシントン州音楽スタンダード（グレード2）の内容

創造	【イメージ】
アンカースタンダード1 芸術的なアイデアや作品を生み出し、概念化する。	
永続的な理解 音楽家の作品に影響を与える創造的なアイデア、コンセプト、感情は、さまざまなソースから生まれる。	
本質的な問い 音楽家はどのようにして創造的なアイデアを生み出すのか。	
パフォーマンススタンダード a. 特定の目的のための、リズムやメロディーのパターン、音楽的アイデアを即興で作る。 b. 与えられた調性（長調や短調など）や拍子（二拍子や三拍子など）の中で、音楽的なパターンやアイデアを生み出す。	
学生への提言 ・短いリズムのパターンをつくる。 ・歌ったり、楽器を演奏したりして、旋律のフレーズをつくる。 ・音楽をつくるために、音楽的要素を探究する。	
例 ・ペンタトニック・スケールに基づいた旋律を即興で演奏するために、木琴や鉄琴を使う。 ・歌の問いかけに歌で応答するために、ペンタトニック・スケールを使う。 ・問いかけと応答の言葉のリズムに合ったリズムパターン（“What's your name?” “My name is” など）を演奏するために、楽器やボディパーカッションを使う。	

(Washington The Arts Learning Standards (Music), p.17 より筆者作成)

「パフォーマンススタンダード」は、生徒が達成すべき知識・スキルを測定可能にする方法を明確に示している。また、それに引き続く形で、永続的な価値を持つ重要なアイデアやコアプロセスである「永続的な理解」、思考の刺激によって探究心を引き起こし、「永続的な理解」を導くための「本質的な問い」が設定されており、この3項目は全米コア音楽スタンダードと同一である。

「学生への提言」と「例」の2項目は、全米コア音楽スタンダードを参考に、ワシントン州が独自に設定したものである。「学生への提言」は、スタンダードを達成するために学習者が身に付けるべき能力が示されている。「例」は、具体的にどのような活動を行うのかを示している。

4. ワシントン州音楽スタンダードにおける「創造」領域

「創造」領域は、「イメージ (Imagine)」、「計画と制作 (Plan and Make)」、「評価と洗練 (Evaluate and Refine)」、「提示 (Present)」の4つの構成要素からなっている。構成要素とグレードに共通する内容（アンカースタンダード、永続的な理解、本質的な問い）を表3に示す。

4つの構成要素をみると、音楽の創作のプロセスに着目して構成されており、これらのプロセスを習得することで、音楽の創造を行うことができる能力を獲得できるようになっている。以下、各構成要素の内容を分析し、これらのプロセスの学習内容を検討する。

(1) 「イメージ」

イメージでは、「芸術的なアイデアや作品の創造、概念化」をアンカースタンダードとし、音楽を創作する上で必要な音楽的アイデアの創出を行うことを目標とした構成要素である。実際にグレード8（以下、G8）では、音楽的アイデアを使いながら、さまざまな音楽形式を用いた中程度の長さの歌曲や器楽曲を創作できることが示されている。

表3 「創造」領域における構成要素と内容

イメージ
<p>アンカースタンダード1 芸術的アイデアや作品の創造と概念化 永続的な理解 音楽家の作品に影響を与える創造的なアイデア、コンセプト、感情は、さまざまなソースから生まれる。 本質的な問い 音楽家はどのようにして創造的なアイデアを生み出すのか。</p>
計画と制作
<p>アンカースタンダード2 芸術的アイデアや作品の構造化と発展 永続的な理解 音楽家の創造的な選択は、その専門性、文脈、表現意図に影響される。 本質的な問い 音楽家はどのようにして創造的な判断をするのか。</p>
評価と洗練
<p>アンカースタンダード3 芸術作品の改良と完成 永続的な理解 音楽家は、新しいアイデアを受け入れる姿勢、粘り強さ、そして適切な基準を適用することで、自分の作品を評価し洗練させる。 本質的な問い 音楽家が創作活動の質を高めるにはどうすればいいのか。</p>
提示
<p>アンカースタンダード3 芸術作品の改良と完成 永続的な理解 音楽家が創作物を発表することは、創造とコミュニケーションのプロセスの集大成である。 本質的な問い 創造的な作品を共有するタイミングはいつか。</p>

(Washington The Arts Learning Standards (Music), pp.1-80 より筆者作成)

まず、音楽学習が始まるK（幼稚園）からは、音楽的要素（拍・強弱・テンポ・旋律の音形）の知覚・理解を行なっていく。その際、実際に体を動かしながら、音楽的要素を実際に体験するようなリトミック的要素が含まれる。創作に関しては、声による即興のレスポンスなどが挙げられる。そして、G2にかけて音楽的要素を増やしながら、短いリズム創作やペンタトニック・スケールなどを用いた旋律創作を行う。G3からは、与えられた音楽の流れに沿った創作や対照的な旋律創作など、音楽の繋がりを意識した創作が示されている。また、創作したものと特定の目的や文脈との関連性の説明も求められている。G5にかけて、特定の調性や拍子の中で、ハーモニーなども含むさまざまな音楽的要素を使いながら、音楽フレーズを創作していく。ここまでの段階では、調性や拍子など限定的な部分上の創作に限られている。G6からG8にかけて、音楽形式を増やしながら短い曲（G7）から中程度の長さの曲（G8）の作曲を行う。その際、自分の表現意図を伝えるために音楽的要素を使用したり、実際に使った音楽形式や音楽的要素を文脈と関連づけて説明したりするように求められている。

このように、まず音楽的要素を知覚・理解し、即興などで音楽に反応する経験を繰り返し、調性や拍子を増やしながら音楽的アイデアを創出していくような段階を踏むことで、曲を創作するスキルが身につくようになっていく。また、曲を作るだけでなく、音楽以外の文脈との結びつきの意識を強調している点の特徴である。

ここでの内容をまとめると、①音楽的要素の知覚・理解・活用、②即興を含む音楽の反応と音楽アイデアの創出、③創作した曲や音楽的アイデアと目的や文脈（社会的、文化的、歴史的）上とのつながりの説明、の3つに大別できる。

(2) 「計画と制作」

計画と実行は、「芸術的なアイデアや作品の構造化と発展」をアンカースタンダードとし、創作した音楽的アイデアを楽譜化したり録音したりすることで記録し、そのアイデアをより発展させることを目標とした構成要素である。

K（幼稚園）からは、好みの音楽的要素を選択することによって音楽的要素の興味を示したり、音楽的アイデアを楽譜や録音にまとめたりすることが示されている。また、G1ではテーマに沿ったコール&レスポンスのフレーズなどの創作も示されている。G2からは、音楽的要素の選択理由を説明したり、楽譜や録音によって記録した音楽アイデアを組み合わせた、記録したりしながら、喜怒哀楽を表す音楽フレーズの創作が求められている。G3、G4になると、創作したものと文脈のつながりも意識していく。例えば、オノマトペや詩、自分で作った物語に合うような音楽アイデアの創作が示されている。G5、G6では、これまでの発展として物語のオペラ制作やコマーシャルソングなど文脈と結びつけた音楽アイデアの創作が求められる。また、ハワイアンミュージックや西アフリカの音楽創作など、多文化的な要素も示されている。最終段階である、G7、G8では、これまで習得したことのまとめとして、音楽の創造プロセスを適用させながら、音楽的アイデアやフレーズを発展させたり、音楽的要素を活用しながら楽曲を作成したりすることが示されている。

これらの内容をまとめると、①音楽的要素の選択と使用、②音楽的アイデアや作品の楽譜や録音による記録、③音楽的アイデアの発展、の3点に大別できる。ここでの楽譜化や録音では、単に記録することを目的としているのではなく、記録した音楽的アイデアやフレーズを組み合わせたり整理したりすることで、創作をする中で音楽の素材を発展させることが視野に入れられている。そして、最終的には、創作のプロセスを理解・適用することで、手順に従った創作を行うことができるようになっている。音楽的アイデアや作曲について示されている点で、「イメージ」と共通事項が多いが、「イメージ」が曲作りのための音楽的アイデアの創出にあたり、「計画と制作」はその創出した音楽的アイデアを、表現意図を伝えるためにどのように発展させたり組み合わせたりするのか、という点で異なっている。

(3) 「評価と洗練」

評価と洗練は、「芸術作品の改良と完成」をアンカースタンダードとし、自分でさまざまな基準を適用して創作した音楽を評価しながら、さらに改善することができることを目標とした構成要素である。

まず、K（幼稚園）の時点で、創作に必要な作業を探り、実践するように示されている。G1までは、教師や仲間からのフィードバックを受けて音楽を改善していく。ここでは、改善の方法やどのように音楽を改善していくかを理解する段階といえる。次第に、自己評価を行ったり（G2）、提供された、あるいは仲間と作った基準で音楽を評価・改善したり（G3）するように示されている。また、G6にかけて、改善したところを示し（G4）、改善の根拠を説明する（G5）ことが求められている。G7、G8では、創作した音楽を、音楽用語を用いながら分析・評価し（G7）、さまざまな基準を用いて、個人で音楽の評価と改善を行うことが示されている。

これらの内容をまとめると、①基準を適用した音楽評価、②音楽の改善、の2点に大別できる。音楽を評価・改善する際にも、感覚的なものではなく基準を用い根拠を説明するような言語化を行うことで、相手に伝え、説得させることを求めている。

(4) 「提示」

提示は、上述の「評価と洗練」と同じアンカースタンダードであるが、主に創作した音楽を人前で発表することを目標とした構成要素である。最終的に、自分でさまざまな作曲技法を駆使して音楽を創作し、実際に演奏を行い、表現を伝えることができるよう、段階的にスタンダードが設定されている。

まず、K（幼稚園）において、仲間の前で発表することが求められている。G3にかけて、表現を伴った

り (G1) 特定の目的を伝えたり (G2) しながら、音楽との関連性を説明するように示されており、発表する際にも音楽と文脈のつながりが強調されていることがうかがえる。さらに、クラフトマンシップ (G5) や個性 (G6) を演奏で表現しながら、最終的にさまざまな表現を伴った演奏を聴衆の前で行うことが求められている。

これらの内容をまとめると、①表現を伝える発表、②表現意図と音楽の関連性の説明、この2点に大別できる。この構成要素では、ワシントン州独自の項目である「学生への提言」と「例」において、G6以降でさまざまな発表形態 (ソロ、アンサンブル) がある、ということが示されているだけで、具体的な指導内容には触れていない。ここでは、クラフトマンシップやコミュニケーションなど、言葉を介さない場合においても表現できるような力を身につけさせている。

5. 考察：「創造」領域における音楽リテラシー

これまでに検討した各構成要素の内容を表5にまとめる。

「創造」領域における音楽リテラシーとは、「特定の目的や文脈 (社会的、文化的、歴史的) に結びついた音楽的アイデアや曲を生み出し、それを伝える演奏ができる能力」と捉えることができる。このリテラシーには、音楽的要素を理解した上でそれらを創作に活かしたり、創作したものを記録するために楽譜を書いたり、ある評価基準をもとに個人が創作した曲を評価・改良したり、自分の意図を表現できるように演奏したりと、単に曲をつくること以外の演奏や鑑賞、音楽理論などの幅広い音楽的能力を含んでいる。

また、ワシントン州の音楽スタンダードの検討を通して得られた活動内容の特徴を3点挙げる。

1 点目は、音楽の要素を理解する活動が多いことである。動いたり、演奏したり、聴き取ったりすることで音楽の要素を知覚させ、理解させている。これは、音楽の創造においては音楽の要素の理解が欠かせないためだと考えられる。

2 点目は、さまざまな音楽ジャンルや、コマーシャルや物語と関連づいた音楽など幅広い音楽の創作を行うことで、文化・歴史・社会などの文脈を伴った音楽の特徴を捉えていることである。

3 点目は、自己や他者へのフィードバックや基準による評価など、音楽を客観的に捉える活動がみられることである。これは、活動のプロセスをメタ的に捉える全米コア音楽スタンダードの特徴が反映されていると考えられる。

これらの特徴をもった音楽活動を通して、音楽を創造するプロセスを身に付け、音楽リテラシーの育成を図っていることがうかがえる。プロセスを明示し手順を踏むことで、より容易に音楽の創造を行い、音楽リテラシーの獲得がしやすくなる。その一方で、音楽の創造のプロセスを学び、そのプロセスに応じることのみが焦点化されることで、自由な発想を阻害してしまう恐れを孕んでいる。

表5 各構成要素の内容のまとめ

構成要素	内容
イメージ	①音楽的要素の知覚・理解・活用 ②即興を含む音楽の反応と音楽アイデアの創出 ③創作した曲や音楽的アイデアと目的や文脈 (社会的、文化的、歴史的) 上とのつながり
計画と制作	①音楽的要素の選択と使用 ②音楽的アイデアや作品の楽譜や録音による記録 ③音楽的アイデアの発展
評価と洗練	①基準を適用した音楽評価 ②音楽の改善
提示	①表現を伝える発表 ②表現の意図と音楽との関連性

6. おわりに

本稿では、ワシントン州音楽スタンダードの「創造」領域の分析を通して、その領域における音楽リテラシーの特徴とその学習内容を明らかにした。ワシントン州の音楽スタンダードでは、全米コア音楽スタンダードの内容に加え、独自に「学生への提言」と「例」の2項目が設定されている。そのため、ワシントン州の音楽スタンダードの分析によって、全米コア音楽スタンダードでは捉えにくい、具体的な音楽リテラシー獲得の流れをみとることができた。しかし、この2項目は構成要素やグレードによって内容や分量にばらつきがあることや、現場の教師の判断や解釈に委ねられている部分がある。この教師の自由裁量の余地は、その学校の生徒の実態に合わせた授業展開を行うことを可能にするものである。また、本稿では、構成要素ごとにグレードを縦割りで検討したが、実際の授業は1つのグレード内に記された構成要素をまたいで展開される。そのため、実際は構成要素ごとに指導しているのではなく、音楽の創造の学習場面で包括的な指導が行われていると考えられる。

本稿では、スタンダード上での分析を中心にしたため、音楽の授業の実情は明らかにしていない。また、「創造」領域に焦点化して検討を行ったため、音楽科全体のプロセスを明らかにできていない。今後は、他の領域の検討や他州のスタンダード分析を進めるとともに、実際の授業の実情を明らかにしたい。

引用・参考文献

- 小川昌文他 (2015) 「世界の音楽科学習指導要領を比較する (1) —アメリカ・ハンガリー・フィンランド・ドイツでは音楽教育をどう考えているのか—」『日本音楽教育学会』45巻 2号 pp.54-58.
- 勝野頼彦 (研究代表) (2013) 『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則 [改訂版]』平成24年度プロジェクト研究調査研究報告書, 国立教育政策研究所.
- 奈須正裕, 江間史明, 鶴田清司, 齊藤一弥, 丹沢哲郎, 池田真 (2015) 『教科の本質から迫るコンピテンシー・ベースの授業づくり』図書文化社.
- Broomhead, Paul (2019) *What Is Music Literacy?* Routledge.
- Shuler, Scott/ Norgaard, Martin/ Blakeslee, Michael (2014) The New National Standards for Music Educators. *Music Educators Journal*, 101(1), pp.41-49.

参考 web 資料

- National Core Arts Standards: A Conceptual Framework for Arts Learning
https://www.nationalartsstandards.org/sites/default/files/NCCAS%20%20Conceptual%20Framework_0.pdf (2019年5月6日取得)
- 2014 Music Standards
<https://nafme.org/my-classroom/standards/core-music-standards/> (2019年6月2日取得)
- Washington The Arts Learning Standards (Music)
https://www.k12.wa.us/sites/default/files/public/arts/standards/2017/MusicStandards_ADA_PASSED_2-6-19_PASSED_11-15-19.pdf (2021年8月12日取得)